

山下さんのグループは、次の「雪わたり」という物語を読みました。そして、登場人物の関係をまとめて図に表し、その図をもとにして考えたことを話し合いました。次の文章や【グループでまとめた図】【話し合いの一部】を読んで、あとの問いに答えましょう。

「ここまでのあらすじ」

四郎ろうとかん子は小さな雪ぐつをはいて野原に出かけると、白いきつねの紺三郎こんと出会った。紺三郎が四郎とかん子に「きびだんごをあげようか。」と言うと、四郎とかん子は、「きつねのだんごはうさうさのくそ。」と言り返した。すると、紺三郎は「きつねが今まで人をだますなんて、無実の罪つみをきせられていたのです。だまされたという人は、お酒によつたり、おくびようだったりした人です。」と言った。そこで、紺三郎は、四郎とかん子をきつね小学校しょうがっこうの幻灯げんとう会かいに招待し、おだんごを食べてもらうことにした。

雪のこおつた月夜の晩ばん、二人は、幻灯会に出かけていった。そこで、白いまくにうつし出されたのは、お酒によつぱらった太右衛門たいうゑもんと清作せいさくが、野原にあるへんてこなおまんじゅうやおそばなどの悪いものを知らないで食べている写真だった。

かわいらしいきつねの女の子が、きびだんごをのせたお皿を二つ持ってきました。

四郎はすっかり弱ってしまいました。なぜって

(右下に続く)

たつた今、太右衛門と清作との野原にある悪いものを知らないで食べたのを見ているのですから。それにきつねの学校の生徒が、みんなこつちを向いて「食うだろうか。ね。食うだろうか。」なんて、ひそひそ話し合っているのです。かん子は、はずかしくしてお皿を手を持ったまま、真っ赤になってしまいました。すると四郎が、決心して言いました。

「ね。食べよう。お食べよ。ぼくは、紺三郎さんがぼくらをだますなんて思わないよ。」

そして二人は、きびだんごをみんな食べました。そのおいしいことは、ほつぺたも落ちそうです。きつねの学校の生徒は、もうあんまり喜んで、みんなおどりがつてしまいました。

キックキックトントン、キックキックトントン。  
「昼はカンカン日の光

夜はツンツン月明かり

きつねの生徒はうそ言うな。」

キックキックトントン、キックキックトントン。

(左上に続く)

「昼はカンカン日の光

夜はツンツン月明かり、

きつねの生徒はぬすまない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

「昼はカンカン日の光

夜はツンツン月明かり

きつねの生徒はそねま<sup>(注3)</sup>ない。」

キツクキツクトントン、キツクキツクトントン。

四郎もかの子も、あんまりうれしくて、なみだがこぼれました。笛がピーと鳴り、まくは明るくなつて、紺三郎がまた出てきて言いました。

「みなさん。今晚の幻灯はこれでおしまいです。

今夜みなさんは、深く心にとめなければならぬことがあります。それは、きつねのこしらえたものを、かしこい少しもお酒によわいな人間のお子さんが食べてくださつたということです。そこでみなさんは、これからもうそをつかず、人をそねま<sup>(注3)</sup>ず、わたしどももきつねの今までの悪い評判<sup>(ひょうばん)</sup>をすっかりなくしてしまうだろうと思ひます。閉会<sup>(へい)</sup>の辞です。」

(右下に続く)

きつねの生徒は、みんな感動して、両手を上げワーツと立ち上がりました。そして、キラキラなみだをこぼしたのです。

紺三郎が二人の前に来て、ていねいにお辞儀<sup>(ぎ)</sup>していいました。

「それでは。さようなら。今夜のご恩<sup>(おん)</sup>は決してわすれません。」

二人ともお辞儀をして、うちの方へ帰りました。きつねの生徒たちが追いかけてきて、二人のふところやかくし<sup>(注4)</sup>に、どんぐりだのくりだの青光りの石だのをに入れて、

「そら、あげますよ。」

「そら、とつてください。」

なんて言つて、風のようににげ帰つていきます。紺三郎は笑つて見ていました。

(注1) うさのくそ || うさぎのフン

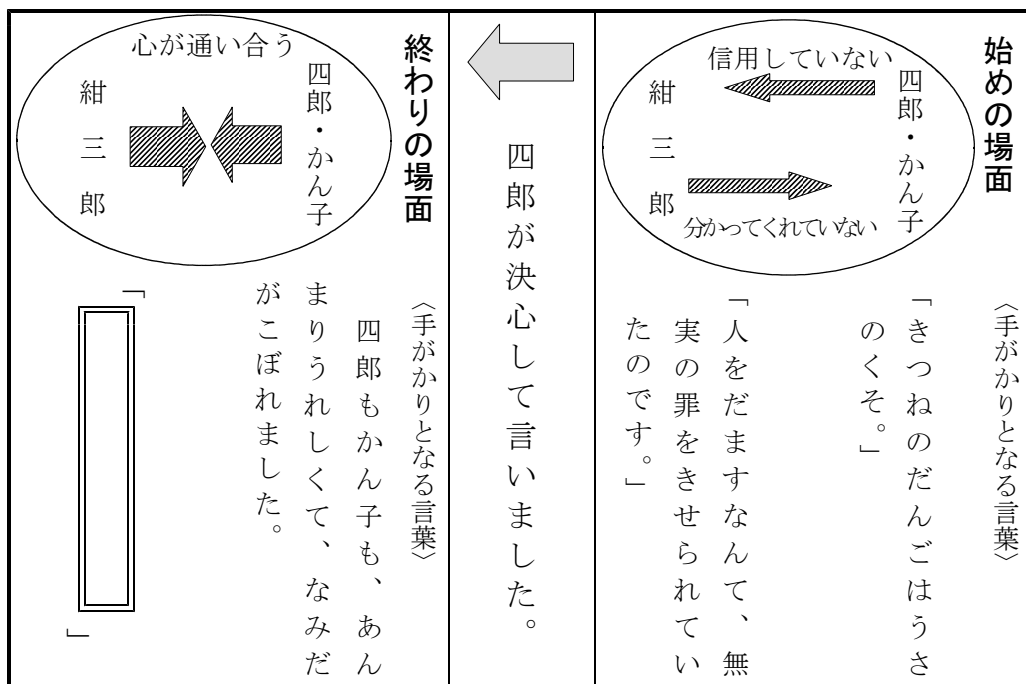
(注2) 幻灯 || スライド。フィルムに光を当てて、一場面  
ずつ白いまくに大きくうつし出す装置<sup>(そう)</sup>

(注3) そねむ || うらやましく思つて人をにくむ

(注4) かくし || ポケット

(みやざわ 賢治「雪わたり」より。一部省略<sup>(りやく)</sup>等がある。)

【グループでまとめた図】



【話し合いの一部】

山下 物語の始めと終わりの場面を比べると、四郎とかん子のふたりと、きつねの紺三郎の関係が変化していることがよく分かります。

田中 始めは、四郎とかん子は、きつねは人をだますものだと思っていたし、きつねの紺三郎は人間がそう決めつけていると、言い合っています。

水上 それが、終わりの場面では、二人の子どもたちときつねたちの心が通い合ったのでよかったと思います。

高木 わたしも、その場面が心に残りました。心が通い合うきっかけになったのは、やっぱり、二人の子どもたちがきびだんごを食べたからですね。

水上 きびだんごを出されたときに、四郎は、すっかり弱ってしまったし、かん子は、アので、食べないのかと思いました。

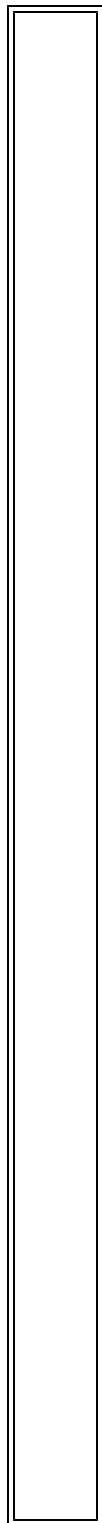
田中 でも、四郎は、イから、食べよう。」とかん子をさそったのですね。

山下 きつねたちの大喜びよろこびしている様子から、自分たちのことを信用してもらえたらうれしさが伝わってきます。まとめた図にある紺三郎の「手がかりとなる言葉」「」からも、よく分かりました。

（話し合いが続く）



二 【グループでまとめた図】と【話し合いの一部】の  
中の紺三郎が二人に言った言葉から、ふさわしい文をぬき出して  
には、同じ文が入ります。本文  
書きましよう。



一  
ア

はずかしくてお皿を手に持ったまま、真っ赤になってしまった

イ

(ぼくは、) 紺三郎さんがぼくらをだますなんて思わない

二

今夜のご恩<sup>おん</sup>は決してわすれません。